

[調査研究報告3]

多文化都市クアラルンプールにおける 文化の創造と競合

多和田裕司
(大阪市立大学)

私の専門は文化人類学で、特にマレーシアのイスラーム社会について実態調査をもとにした勉強を進めています。それで、今回ミニシンポジウムの共通テーマである、歴史遺産の活用、またそのための博物館の役割という点に関しましては、多少発表内容がずれるかもしれませんが。ただ、文化ということについて、何か議論の材料を付け加えることができると考えております。

1 問題の所在

まず「問題の所在」というと少し大げさなことになるかもしれませんが、今日の発表でどういうことを考えたいか、まとめておこうと思います。

まず、文化の保存や表象、文化を創造していくことにまつわる問題点、あるいは困難さを考えたいと思います。どういうことかと申しますと、たとえば「文化を保存する」という表現を我々は簡単に使ってしまうますが、そのようなさいには、当然、「保存されたもの」にたいする無数の「保存されないもの」が出てくることとなります。そのプロセスのなか

には、「選択」といったことや、「正当性」という問題も入ってくることになります。つまり、選ばれたものが正当な文化であるという決定のされ方がなされてしまうわけです。あるいはそれに関連して、文化の「優劣」という問題も出てくるかもしれません。このようなことを突き詰めて考えていくと、ひょっとしたらふだん我々が何気なく使っている「文化」の概念そのものに潜んでいる問題、その概念の否定的な側面といったものにまで至るかもしれません。ただ、その点については今日の発表では話が大きくなってしまいますので、最初に挙げたような点を、マレーシアのクアラルンプールという都市を題材にしながら話をしていきたいと思います。

2 多民族国家マレーシア

まず、マレーシアという国ですが、地理的には半島部と、インドネシアにつながるサバ州・サラワク州の二つの州、これは東マレーシアと言われますが、そういう二つの地域から成り立っています。

マレーシアは多民族・多文化ということで非常に有名な国です。どのような形で多民族性・多文化性があるのかということについては、資料として添付しておきました【表 - 1】を参照してください。細かな数字があがっていますが、ポイントとしては、表のいちばん右側のマレーシア全体のところのパーセンテージを見ていただければと思います。マレーシアは 97 年の時点で、人口が約 2 千万。そのうちマレー系と呼ばれる人たちが 5 割少しを占めます。あと中国系、インド系の人たちがそれぞれ 3 割弱、1 割弱という割合になっています

それから表に「ブミプトラ」という言葉がありますが、これは直訳すると「土着の人」という意味合いです。本来はマレー系の人たちもブミプトラのカテゴリーに入るわけですが、「その他のブミプトラ」というところで言いますと、いわゆる先住民族系の人たちがこれに当たります。

それから資料では、この表に続けて、言語的、社会的な特徴を付けておきました。表のこの右半分は（引用元の資料とは別に）私が勝手につけたものですが、そこにあげておきましたような言語的な差異、それから 70 年代ぐらいまでは産業あるいは居住地域の違い

もありました。

次に【表 - 2】をご覧ください。これは、先ほどの表 - 1 に続けてもよかったのですが、はっきりさせるために別に用意しました。民族別の宗教の違いを表す表です。細かな数字が並んでおり恐縮ですが、注目すべきはマレー系の宗教のところですか。イスラームが**99.96%**、つまりほぼ**100%**がイスラーム教徒であるということになっています。それに対して中国系の人たちは仏教が**68%**、それから中国系の宗教、これにはたとえば道教なども入ってくると思われそうですが、それが**20%**ぐらいです。この表は国の調査のデータで、「あなたの宗教は何か」と一つ選ばせる形になっている関係上このような数字が出ていますが、現実的には中国系の人たちは仏教を信仰し、かつ中国の伝統宗教も信仰しているというケースが多いようです。それから、インド系の人たちはヒンドゥー教が8割以上です。

これらの点からわかるように、マレーシアではその多民族性が同時に多言語性であり、かつ多宗教性であり、しかも一対一対応的にそれぞれの民族集団と言語・宗教が結びついている、そういうかたちでひとつの国が成り立っています。これがマレーシアの特徴ということになるでしょう。

これは、いま申し上げた多民族性をビジュアルに表現したものです【図版3 - 1】。上下の写真を見ていただくと、違いがはっきりわかると思います。上の写真はマレー系のイスラーム教徒の人たち。下が中国系の非イスラーム教徒の人たち。とくに女性の服装等を見ていただければ、そのあたりの違いが非常によくわかると思います。マレー系の女性の服装については、あとで少しでてきますので、このような様子であることを覚えておいてください。

3 クアラルンプールの形成

このような国のありかたを見た上で、次に、「クアラルンプールの形成」に入っていきたいと思います。これはクアラルンプールの簡単な形成史です。

クアラルンプールという町は**19**世紀の半ば、**1857**年に海岸部に拠点を持っていた王国の王が川をさかのぼって内陸部に錫の探検隊を派遣するということから始まりました。中国人の探検隊が川をさかのぼってきて二本の川の合流点までたどり着きます。地図の北

が上流ですので、二本の川が下ってきて、その地点で交わり、途中西に向きを変えて海に通じる。そういう位置関係になっています【図版3 - 2】。

なぜ中国人の探検隊が錫の発掘に向かったかということですが、これは皆さんご存じのように、マレー半島は錫がとれる所で、イギリスの植民地下、錫の開発はひとつの産業になっていました。その時に、中国系の労働力が大量に移民としてやってきて、労働に従事しました。その背景のなかで探検隊が組織されたわけです。かなり悲惨な探検行だったようですが、最終的に錫鉱山が発見されて、そこからクアラルンプールの開発、まさにゼロからのスタートが始まりました。これが合流点の現在の姿です【図版3 - 3】。正面にモスクがありますが、これはその当時はまだありません。1900年代のはじめに出来上がったものです。

1868年には、中国系移民のなかの有力者であるヤップ・アー・ロイなる人物が、いわゆる町の顔役的な存在として町を整備していきます。先ほどの地図は1875年頃の様子をあらわしていますが、川の合流点の東側にオールドマーケットスクエアという所があり、ここにバザールが立ち、にぎわいを見せていたようです。これはかつてバザールがあった所の現在の様子ですが、何となく雰囲気からうらさびしい感じがおわかり頂けるのではないのでしょうか【図版3 - 4】。まさにその通りなのですが、あとでお話するように、初期の中心地であった所が現在ではだんだん寂れていっているという状況があります。

1880年には、植民地化の過程のなかで、クアラルンプールがイギリス側の理事官駐在地に格上げされます。それ以前は、理事官駐在地は川を下ったもっと海岸部の町にあったのですが、この時点から文字通り当時のマラヤの中心的な町になっていきました。これは、先ほどと比べて10年ほど新しい時代の地図です【図版3 - 5】。川の合流点を基準に考えていただけるとよくわかりますが、クアラルンプールという町が少し拡大をしていく状況が読みとれるのではないかと思います。

1957年に独立した後は首都として今日にいたるわけですが、1970年代にはいると、1971年から開始された新経済政策（いわゆるブミプトラ政策）によって、マレー系の人たちが大量にクアラルンプール郊外の住宅地（ニュー・タウン）に移り住むようになってきます。もともとは中国系、インド系、そして（植民地時代には）イギリスの人々が中心であったところに、マレー系の人口が急速に増えていきました。

これは、ジャーメ・モスクです【図版3 - 6】。先ほどの川の合流点に、1909年に建てら

れました。切り開かれた当時は墓地であったそうです。

これは、チャイナタウンの南のはずれのほうに建てられている陳氏書院です【図版3 - 7】。チャイナタウンというのは、川の東側、合流点を中心に南北に広がる区域です。この建物は中国系の、おそらくお金持ちの一族の私邸であったと思います。何回も改修されていると思います。もともとは**1906**年に造られたと聞いています。

これは、おなじくチャイナタウンのなかにあるヒンドゥー教寺院です【図版3 - 8】。チャイナタウンといってもすべて中国系の人が暮らしているというわけではありません。インド系の人たちは、錫と並んでもうひとつマレー半島の産品であった天然ゴムのプランテーションの労働力として大量にやってくるようになったわけですが、クアラルンプールの古い地区にはインド系の人々が持ってきたヒンドゥー教の寺院が点在しています。

これは、スルタン・アブドゥル・サマド・ビルディング【図版3 - 9】。植民地時代に行政機関が置かれていた建物で、いまは連邦裁判所、日本風に言うと最高裁判所として使われています。

これは**1911**年に完成したクアラルンプール駅です【図版3 - 10】。イギリス人建築家の手になるもので、左側の部分がインドのイスラームの影響を受けていると言われています。右側のプラットホームのほうは屋根で覆われていますが、これは当時のイギリスの駅舎がこのような形であったことからこうなったようです。

この建物自体は**20**世紀になってから新たに造られたものだと思いますが【図版3 - 11】、かつてこのあたりにイギリス人の社交クラブがありました。地図【図版3 - 5】をもう一度ご覧頂きたいのですが、位置でいいますと川の合流点のすぐ南、西側に先ほど紹介した連邦裁判所ビルが位置します。その前の広場、地図中ではパレード・グラウンドとなっていますが、現在はダタラン・ムルデカと呼ばれています。このあたりに昔から社交クラブがありました。ちなみに画面【図版3 - 11】の一番奥、画面上ではクリアではありませんが、ブキット・アマン (**Bukit Aman**) と看板が出ている建物が見えると思います。あれがマレーシアの警察庁です。このあたりは地形の政治学的利用といえるかもしれませんが、地図【図版3 - 5】でいうと、左側（西側）が地形的に少し高くなっています。東に向かってだんだん低くなり、川があり、川を越えてチャイナタウンやインド人街と続いています。高い側に先ほどの植民地政府の建物であったり、社交クラブであったり、そして一番高いところに警察庁を作ったわけです。これは植民地時代からの仕組みですが、その名残をい

までも垣間見ることができます。

次にお見せするのは、**1996**年の観光パンフレットに載っている地図です【図版3 - 12】。なぜこれを紹介したかといいますと、ご覧のように色分けがされているので非常にわかりやすいと思い、持ってきました。まず、地図上の赤色は**places of interest**、つまりいわゆる観光名所です。緑色が銀行で、まとまっています。それから青色がホテル、紫色が**shopping complex**、日本風にいうとショッピングセンターやデパートを中核とした施設です。先ほどらいご紹介した川の合流点を中心にして、昔からの建物、名所があり、すぐ隣に銀行が集中しているような場所があり、少し外側にショッピングセンターやホテルなどがあります。それから、この地図の時点ではまだ出来上がっていませんでしたので、現在のクアラルンプールを代表する建物であるペトロナス・ツインタワーがまだ載っていません。この地図でいいますと、右端の少し建物のイラストがあるあたり、その近くに現在ペトロナス・ツインタワーができています。

ここまでお話ししてきましたように、クアラルンプールは、最初に川の合流点から始まり、徐々に外側に拡大していき、しかも中心には非マレー系の人たち、あるいは非マレー系の文化遺産、建物が集中している地域があり、外側には新しい建築物群や地域が広がっていきました。この街の景観は、ある意味でマレーシアの多民族、多文化状況を典型的にあらわしているといえるかもしれません。

4 文化の創造と競合

次に、それではマレーシア政府はいったいどのように国をまとめようとしているのか、それを考えたいと思います。とくに文化との関連のなかで、多民族、多文化の国ですから、それに特有の問題なども出てきたりするわけです。

政府にとって非常に大きな転換点となったのが、**1969**年にクアラルンプールで発生した大規模な民族衝突事件（**5・13**事件）です。おもにマレー系と中国系の人たちが、総選挙のあとのデモ行進をきっかけにしてぶつかってしまったわけですが、公式発表で百数十人が亡くなるという悲惨なものになってしまいました。

この**1969**年の事件を受けて、政府は、マレーシアを「マレー系が主導する多民族（多

文化・多宗教) 国家」という形でまとめていくような政策をとることになります。マレー系が主導するというのは独立以来の形としてはそうだったのですが、その当時はいろいろな事情があり、あまり強くは進められていませんでした。ところが、民族衝突事件が起きたことをきっかけに、マレー系主導が非常に強く打ち出されるようになっていきます。

たとえばこの事件後、学校教育においてマレーシア語を徹底化していくというような政策が出されます。あるいは **1971** 年には、先ほど少し触れた新経済政策の導入がはかられます。新経済政策とは、政府が積極的にマレー系を後押しして近代産業部門に入れていく、それをもって、農漁業に従事していることが多く貧しい状態にあったマレー系の経済力を急速に変えていこうとする政策です。

このような動きのなかで、文化についても新しい政策が打ち出されました。それが **1971** 年に開催された国民文化会議です。これはクアラルンプールのマラヤ大学で4日間にわたって開催されたものですが、約 **1000** 人が出席し、報告が **60** 件あったという記録があります。資料として、当時の首相の国民文化会議開会の辞をつけておきましたのでご覧ください【資料 - 1】。

この会議で、マレーシアの国民文化の三原則とされるものが決定されます。まずマレーシアの国としての文化は「土地の人々」の文化を基盤にする。先ほど土地の人々という意味の「ブミプトラ」という言葉を紹介しましたが、「土地の人々」の文化とは基本的にマレー系の人たちの文化ということになります。次に、それ以外の文化については、ふさわしい文化を国民文化の要素として取り入れる。これは中国系やインド系、西洋の文化などを指しているわけですが、なにをもってふさわしいとするかは現実には非常に難しい問題をはらんでいるわけです。いずれにしても、ふさわしいものであれば国民文化の要素に取り入れる。それから三番目として、イスラームが国民文化の重要な要素となる。先ほど申しましたようにマレー系の人たちはイスラーム教徒です。そのイスラームを国民文化の重要な要素として扱うわけです。この三つが、国民文化の三原則として決定されました。

文化については、**1982** 年にマレー世界会議という文化に関するまた別の会議があり、そのときも当時総理大臣になったばかりのマハティール首相がこの国民文化原則を守っていくと宣言しています。これも資料につけておきましたのでお読み下さい【資料 - 2】。このような国民文化原則やそれをもとにした国民文化政策にたいしては、当然批判もあります。大きく二つに分けることができますが、ひとつは多文化主義的な立場からの批判です。

これは、中国系を代表とする非マレー系の人たちからの批判になります。たとえば中国系の人たちは自分たちでも文化に関する会議をおこない、共同覚書を発表しました。これはあまり政府には反映されていないようにも思えますが、これについても資料を付けておきました【資料-3】。

もうひとつの批判は、イスラームの側からの批判です。とくに急進的なイスラーム勢力からのものです。政府を動かしているマレー系の人たちもイスラーム教徒なのですが、それよりもさらに急進的な勢力が、たとえば PAS という政党などが国民文化政策はイスラームをもっと全面的に出すべきだと批判を展開しています。PAS の党綱領の一部を資料としてつけておきました【資料-4】。PAS は 1990 年の選挙で北部のある州の政権を取ることができたのですが、その州では伝統的なマレー文化を規制するような方針が打ち出されています。たとえば影絵の芝居などですが、これはヒンドゥー的な要素が入っているからという理由だそうです。

これからはしばらく写真で、国民文化政策がどのような形で実現されているかをご紹介します。

まず、これはクアラルンプールの国立博物館です【図版3-13】。外観はマレー系の伝統的な家屋を模しているという説明がされています。実際、農村部に行くと、このような形の屋根の高床式の家を多く見ることができます。

これは博物館の壁に描かれたものです【図版3-14】。右からマレーシアの歴史を絵で表す構成になっています。左のほうに日本の旗が見えますが、これはもちろん日本軍の軍事占領時代が表されているわけです。

これは博物館のなかの展示の一部で、マレー系の人々の様子をあらわしています【図版3-15】。画面が暗くてわかりづらいかもしれませんが、農村にあるであろう家屋とそこに暮らす家族を再現しています。現実には、いまのマレー系の人たちは、新経済政策の成果が発揮されてかなり違った生活をしています。展示ではたしかに農村の雰囲気は出ているのですが、子どもたちはたとえばテレビゲームで遊んでいたります。博物館の展示では、マレー系の文化はこういう形の文化だと示してしまうわけです。

これは中国系の文化ということで展示がされています【図版3-16】。チャイナタウンなどではショップハウスといって1階がお店で2階以上が住居になっている形式の住居が多いのですが、それが再現されているのだと思います。

これはインド系で、洞窟のような所で儀式をしている様子がわかります【図版3 - 17】。クアラルンプールの郊外にヒンドゥー教の非常に神聖な場所があり、そこで年1回大きな祭がおこなわれるのですが、その様子を模したものだと思います。

ちなみに、写真でご覧頂いているので伝わらないかと思いますが、それぞれの展示スペースというところで三者の表現のされかたは大きく違っていています。マレー系の展示スペースは、中国系・インド系に比べて倍以上の広さがとられており、家屋なども非常に大きく再現されています。それに較べると、中国系・インド系の展示はかなり小さいといわざるをえません。

この写真は国民文化がどのように表象されているかの例としてご紹介したいと思います【図版3 - 18】。雑誌の掲載広告なのですが、「MALAYSIA TRULY ASIA」と題された、現在おこなわれている政府主導の観光キャンペーンです。いろいろなところ、たとえばポスター、観光パンフレット、雑誌記事、テレビCMなど、いろんなメディアにこういった五人の女性が登場するのですが、注目して頂きたいのは、かならずマレー系、中国系、インド系、それからサバ・サラワクの先住民の人たちという五人で構成されていることです。さらに興味深いのは五人が並ぶ場合の立ち位置で、必ずマレー系がセンターをとります。そして、その両側に中国系、インド系、いちばん外側に先住民という並びになることです。これなどは、マレーシアの多民族、多文化性と、そのなかでどの文化が主導する文化であるかを、内外にたいしてビジュアルにあらわしているといえるのではないのでしょうか。

これもおなじ主旨でご紹介するものですが、マレーシアの観光省のホームページのヘッダー部分です【図版3 - 19】。ホームページの図柄をそのままうまくパソコンにコピーできなかったので、ファイルごとに別々に取り込んでつなげてみました。やはりセンターにマレー系が位置しています。服装から見るとその右側が中国系、髪の毛の雰囲気から見ると左側はインド系、そして両サイドに先住民の人たちという並びになっています。

これは、先ごろ行われたアテネオリンピックのマレーシア選手団の写真です【図版3 - 20】。マレーシアのオリンピック委員会のホームページから取り込んだものですが、皆さんが着ているのがオリンピックのユニフォームです。テレビでご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、開会式の入場行進のとき、マレーシア選手団はこの衣装で入場しました。はじめの方の写真でイスラーム教徒のマレー系女性の服装に注目していただきたいと申しましたが、このユニフォームはあきらかにマレー系の服装をベースにしているとい

うことがわかります。それから、その後ろに立っている男性たちはみんな黒い帽子、いわゆるマレー帽をかぶっています。オリンピックの代表選手団ですから、そのなかには中国系、インド系、そのほかいろいろな人たちがいるのですが、すべてマレー系の衣裳で代表される形になっているわけです。

5 「イスラーム化」の進展

このような形で、マレー系が主導する多民族・多文化国家というものがああり、またそれが表象されてきたわけですが、**1980**年代になってくると、今度はそれにイスラームの要素が非常に強く入ってくるようになります。これにはいろいろな理由が考えられますが、たとえば国際的にはイスラーム世界に共通する現象としていわゆるイスラーム復興運動が**1980**年代ぐらいから高まってくることもそのひとつです。マレーシアの国内的要因としては、先ほど言及した新経済政策が効いてマレー系の経済力や社会的地位が上がり、そのなかでマレー系の人たちの中の競争あるいは権益を求める争いが強まってきた。そのときにイスラームが自分たちの行動・立場を正当化するものとして使われていき、そのプロセスで、イスラームへの指向が非常に高くなっていきました。

先ほど挙げた、イスラーム国家樹立を目指す **PAS** という政党は、**1990**年にはある州で政権をとるというところにまでいたりしました。けっこうマレー系の支持を集め、拡大を続けていく傾向も見てとれます。これにたいして、政府側も対抗するかのよう「イスラーム化」とでも呼べるような政策を進めるようになってきました。政府側にしても **PAS** 側にしても、選挙で票をもらわなければならない、つまりマレー系からの支持を得ないといけないわけですから、一方の **PAS** の側がイスラームを全面に出して挑みかかってくる以上、政府側も自分たちのイスラーム性を強く打ち出す必要が出てくるというメカニズムです。

たとえば **1982**年には政府は「イスラーム化」の一環としてイスラーム銀行を設立しました。銀行がひとつできたくらいでという感じがするかもしれませんが、イスラーム世界にあってはとても意味のあることでした。ご存じのように、イスラームでは利子のやりとりは禁止されています。それでどのように現代的な金融制度をイスラームの枠組みのなか位置づけていくかということが、イスラーム圏が直面している大きな問題のひとつとも

なっています。イスラーム銀行の設立はその解決への一歩となるものです。

また国際イスラーム大学というのもクアラルンプールに開校しました。これは、マレーシア政府だけではなく、中東のイスラーム諸国からの財政的援助もあったようですが、イスラーム研究の世界規模の研究拠点を作ろうということのできたものです。イスラーム銀行にしても国際大学にしても、それぞれイスラーム世界のなかで非常に意義のあるものをマレーシアが作りだしたわけです。

これらの例は政府の「イスラーム化」政策を象徴するようなものですが、**1980**年代の半ばくらいからは文化一般についても、先ほどの「マレー系が主導する多民族（多文化・多宗教）国家」にプラスして「イスラーム」に重きがおかれるようになっていきます。国民文化がその方向に変わっていききました。

これも写真を使いながら、その実際をいくつか見ていただこうと思います。

これは映画の屋外看板です【図版3 - 21】。左側がクアラルンプールのもので、右側がクランタン州、先ほど少し紹介した **PAS** が政権をとっている州です。おなじ映画のポスターですが、違いがわかりますでしょうか。たとえば女性の髪に注目してください。クアラルンプール・バージョンではふつうに髪が描かれています。ところが、イスラーム政権下のバージョンでは髪の毛にペンキを塗って、つまり髪を隠すような形で描かれています。これは非常に象徴的な例だと思いますが、イスラームの広がりがかえらるでしょう。

これはクアラルンプールの、ある政府系の建物です【図版3 - 22】。**1984**年に建築されたものですが、だいたいこの頃からクアラルンプールにいわゆる高層ビルが次々に建てられていきます。左上の写真はこの建物の最上部です。そのいちばん上のところにアラビア文字で「アッラー」と刻まれています。それから左下の写真ですが、建物の足の部分が5本あります。これはイスラームの基本的な教えである六信五行の五行を象徴するものです。

これもおなじ **1984**年に建てられたビルです【図版3 - 23】。先ほどご覧いただいた裁判所の建物ではなく、画面いちばん奥の白っぽい建物の方です。遠くから見ると近代的な高層ビルに見えると思います。

近くで見ると、実はイスラーム的なモチーフのデコレーションがふんだんに使われています【図版3 - 24】。

これは街なかのオブジェです【図版3 - 25】。左の写真は広告用のもので、これは銀行の広告のようです。高さは目分量で2メートルかそれ以上あるかなり大きなものです。右は

公園にある噴水です。どちらもイスラーム的な色彩を帯びたモチーフが使われています。こういったものが **1980** 年代以降、クアラルンプールのあちらこちらで数多く見られるようになってきました。

これも、こんなところまでという例です。空港で配っているガイドブックです【**図版 3 - 26**】。日本語と英語両方の併記で書かれている、どこの空港でもよく見かけるようなものです。その「**Kuala Lumpur**」という文字に注目してください。モスクの塔の先端の形にデザインされています。こういうところまで含めて、つまり「国のかたち」をどのようにあらわすかにかんして、イスラームが非常に広く広がっています。

これが最近できたペトロナス・ツインタワーです【**図版 3 - 27**】。いまはどこかに抜かれたようですが、**1998** 年にできた当時は、世界一の高さを誇っていました。片一方を日系企業が建て、もう片一方を韓国系企業が建てたということで、日本の新聞にも紹介されていたかと思います。最先端技術を使った高層建築です。

建物の内部、とくに低層階の部分は、最新のいわゆるデザイナーズ・ブランド、高級ブランドの店舗が並ぶショッピングセンターになっています【**図版 3 - 28**】。

このあたりはペトロナス・ビルを中心にホテルなども含めて、広大な公園に整備されています【**図版 3 - 29**】。この写真を見ていただくとわかるように、公園のなかにモスクがあるんですが、ちょうどペトロナス・ツインタワーの2本のタワーがモスクの塔をイメージするような、あるいはそういう形に見立てることができるようなデザインがなされています。

6 「文化」をめぐる問いかけ

写真はこれですべて終わりですが、いまご覧いただいたように、国のありかたとして、当初はマレー系が主導する多民族・多文化国家というものが前面に打ち出されておりまし。イスラーム化が進行してからは、それにイスラームがくわわったものが押し出されるようにかわっていきました。もちろんそれは政府が中心になって進めてきたものです。

最後に、本発表の冒頭の問題を受けるものとして、文化をめぐる問いについて触れておこうと思います。たとえば文化遺産や伝統、「・・・らしさ」などを用いることにともなう政

治性という問いです。いま紹介してきたように「マレーらしさ」あるいは「イスラーム」を文化という形で用いることが、マレーシアのなかで非常に政治的なものであるということが、わかっていただけたのではないかと思います。しかも、考えないといけないのは、文化というのは非常によき感じのするもの、よきイメージのするものですから、我々は「文化を守ろう」という言葉を使うときに、あるいは「文化」に触れながらなにごとかを言うときに、誰かを抑圧しているかもしれないとは思わないわけです。現にマレーシアの博物館の人も、マレー文化の展示をしているのだとある意味で「善意」でやっているのだと思います。ところが、そのように「善意」でやっていることが、まわりまわってたとえば中国系やインド系の人たちにたいするなんらかの抑圧にもつながっている可能性がある。「文化」を扱う者は、このことを忘れないようにしないといけないのではないのでしょうか。

文化を主張することが他者に対する抑圧にならないためには、「誰が、誰にたいして、何のために、どのような状況で、どのようにして文化について言及しているのか、あるいは文化を使っているのか」を押さえておく必要があるのではないかと、マレーシアの例から言えるのではないかと思います。ありがとうございました。

(注記) 本報告はプレゼンテーション・ソフトを使用しながらの口頭発表形式でなされた研究報告を、あらためてテキスト化したものである。テキスト化にあたり、図版-18、19、20、21 については、肖像権を考慮して掲載を省略した。なお、図版-19、20 についてはウェブ・サイト上で公開されているので、当該 URL を記しておいた。

多和田報告 資料

資料 - 1 : 「国民文化会議」開会の辞 (1971 年) トゥン・ラザク (マレーシア首相)

このヌサンタラ (多和田註: マレー島嶼部) の地に暮らしてきた我が国民の祖先は、非常に豊かで質の高い文化を残してくれた。それゆえに、当然、現在形成の途上にある国民文化は、この地に根ざす人々の文化に基づくべきであるという考えを受け入れる。さらには、遠い昔よりこの地に到来しさまざまな影響を与え、それによって来るべきマレーシア文化の形態を確かなものとし新鮮さをくわえることのできるような文化の要素をも、我々は取り入れるべきである。しかし、国民文化の形態を模索し定めるさいには、我々の社会が多民族の社会であるという事実を忘れてはならない。

資料 - 2 : 「マレー世界会議」演説 (1982 年) マハティール (マレーシア首相)

我々はすでに、ひとつの言語すなわち国語と、ひとつの文化すなわち国民文化をとおして統一と安定を創造し促進することに合意している。国語はマレー語をもとにするものであり、そして、国民文化は、マレーシアに土着の人々の文化に基づく文化である。民族文化のような個々の文化を实践する自由は、我が国の憲法において、一定の枠組みと制限のなかで保証される。……したがって、国民文化の概念にかんする疑問は、国語にかんする疑問についてとおなじく、もはや生じない。疑問となるのは、ただ、この概念に中身を与え、ともに生きることを大切にするための、努力と責任についてのものだけである。もし我々のすべてが、平和で安定し、人々が安寧と喜びのうちに暮らすような国家を心より願うならば、言語と文化を政治の問題にしてはならない。そのようなことをすれば、統一を否定する勢力を利するのみであり、忠誠が疑われることになる。

資料 - 3 : 『国民文化にかんする共同覚書』決議 (1983 年 3 月 27 日)

① 『覚書』における国民文化原則

(1) 各民族文化のすばらしい要素が国民文化の土台とならなければならない、(2) 科学、民主主義、法治、愛国心が、共通の文化的価値構築への指針となる、(3) 共通の文化的価値は、多民族という形式をとおして表現されねばならない、(4) 国民文化形成の過程

は、すべての民族が対等であるという原則と民主的手続きをもってなされなければならない

②『覚書』における政府への要求事項

(1)すべての民族集団が自らの言語・教育・文化を保存発展させることができるという、憲法にうたわれた権利を尊重すること、(2)共通の文化的価値を形成するために、さまざまな民族集団の文化の交流についてイニシアチブをとること、(3)健康的な文化活動を促進し、ネガティブな価値をとまなうものはこれを禁ずること、(4)あらゆる公的機会や儀式において、すべての民族集団の文化伝統、宗教、慣習を尊重すること、(5)国民文化についての議論にかんしては、あらゆる文化的、宗教的組織の代表者が招かれなければならないこと、(6)文化・青年・スポーツ省の文化にかんする国民諮問委員会への、すべての主要な文化団体、教育団体の代表者の指名

資料 - 4 : Parti Islam SeMalaysia (PAS) 『党綱領』

目的「我が国において、イスラーム的価値と崇高なるアッラーの法が実行される社会および政府の建設を目指す」(第5条)

「信仰および法としてのイスラームを擁護するとするとともにイスラームを政治および国家の指針となし、政府、行政、経済、社会、学問、教育等のあらゆる分野における公正と発展を確立する努力のなかにイスラーム的価値を導入する」「イスラームの教義から逸脱しないような価値に基づく国民文化をもとめる」(第6条)

参考文献

多和田裕司

1999 「マレーからマレーシアへ：マレーシアにおけるあらたな国家像への挑戦」『長崎大学総合環境研究』第1巻2号、pp.83-95.

2004 「『多様化』するイスラーム：現代マレーシアにおけるマレー系アイデンティティの変容」『都市文化研究（大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター）』第3号、pp.84-96.

表 - 1 : 各民族集団の人口ならびに人口に占める割合

1997年	半島部	サバ	サラワク	マレーシア(%)
マレー系	9,680	153	421	10,253 (51.1)
その他のブミブトラ	151	1,061	966	2,178 (10.9)
中国系	4,655	242	533	5,430 (27.0)
インド系	1,538			1,555 (7.7)
その他	442	219(*)	17(*)	622(**)(3.3)
人口(単位千人)	16,466	1,675	1,937	20,078 (100.0)

(*)インド系を含む (**)インド系を除く

出典 : *Information Malaysia 2002 Year Book*, pp.79-80.

(*) その他の文化的社会的特徴

言語	70年代頃まで	帰属
マレー語	農漁業(地方)	各旧王国
各中国語	商業(都市・町)	
タミール語	プランテーション	
英語		

表 - 2 : 各民族集団別の宗教人口割合(パーセント)

1991年	イスラーム	キリスト教	ヒンドゥー教	仏教	中国系宗教	民族宗教	その他	無宗教	不明	合計
マレー系	99.96	0	0	0	0	0	0	0	---	
その他のブミブトラ	32.0	47.0	---	0.7	0.2	11.3	1.8	6.8	0.1	
中国系	0.4	7.8	0.2	68.3	20.0	0.1	0.3	2.7	0.3	
インド系	5.3	8.1	83.1	0.7	0.1	0.1	2.6	0.1	0.1	
その他	88.1	5.2	0.2	6.1	0.1	---	0.1	0.1	---	
全体	57.6	7.9	6.6	19.1	5.5	1.2	0.5	1.5	0.1	100

注記 : --- は 0.1 % 未満をあらわす。端数処理のため各行の合計は必ずしも 100 % になっていない。

出典 : Jabatan Perangkaan Malaysia 1991

*Population and Housing Census of Malaysia 1991, General Report of the Population Census, Volume 2, Kuala Lumpur: Jabatan Perangkaan Malaysia, pp.108-114.*の各数値より算出。

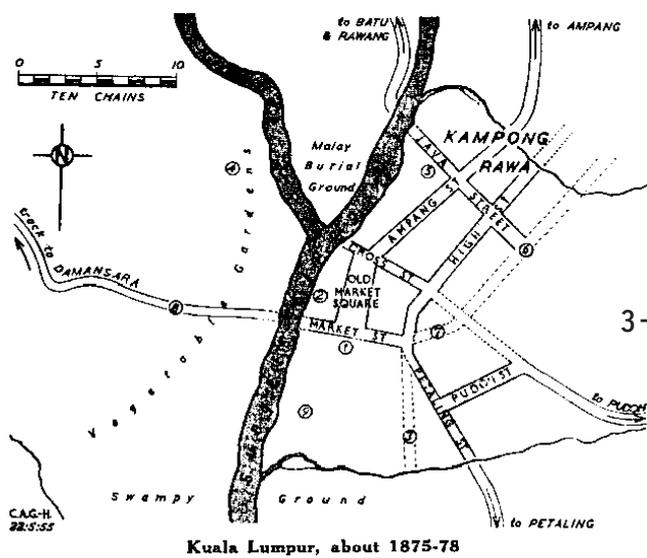
多和田報告 図版



3-1 (1) マレー系イスラーム教徒



3-1 (2) 中国系非イスラーム教徒



3-2 クアラルンプール地図 (1875-78)
J. M. Gullick (1988 [初版1955])
Kuala Lumpur 1880-1895, p.18



3-3 クラン川、ゴンバ川合流点



3-4 メダン・パサール



3-5 クアラルンプール地図 (1889)

J. M. Gullick (1988 [初版 1955]) *Kuala Lumpur 1880-1895*, p.41.



3-6 ジャーム・モスク (1909年)



3-7 陳氏書院 (1906年)



3-8 スリ・マハ・マリアマン寺院 (1873年、1965年改築)



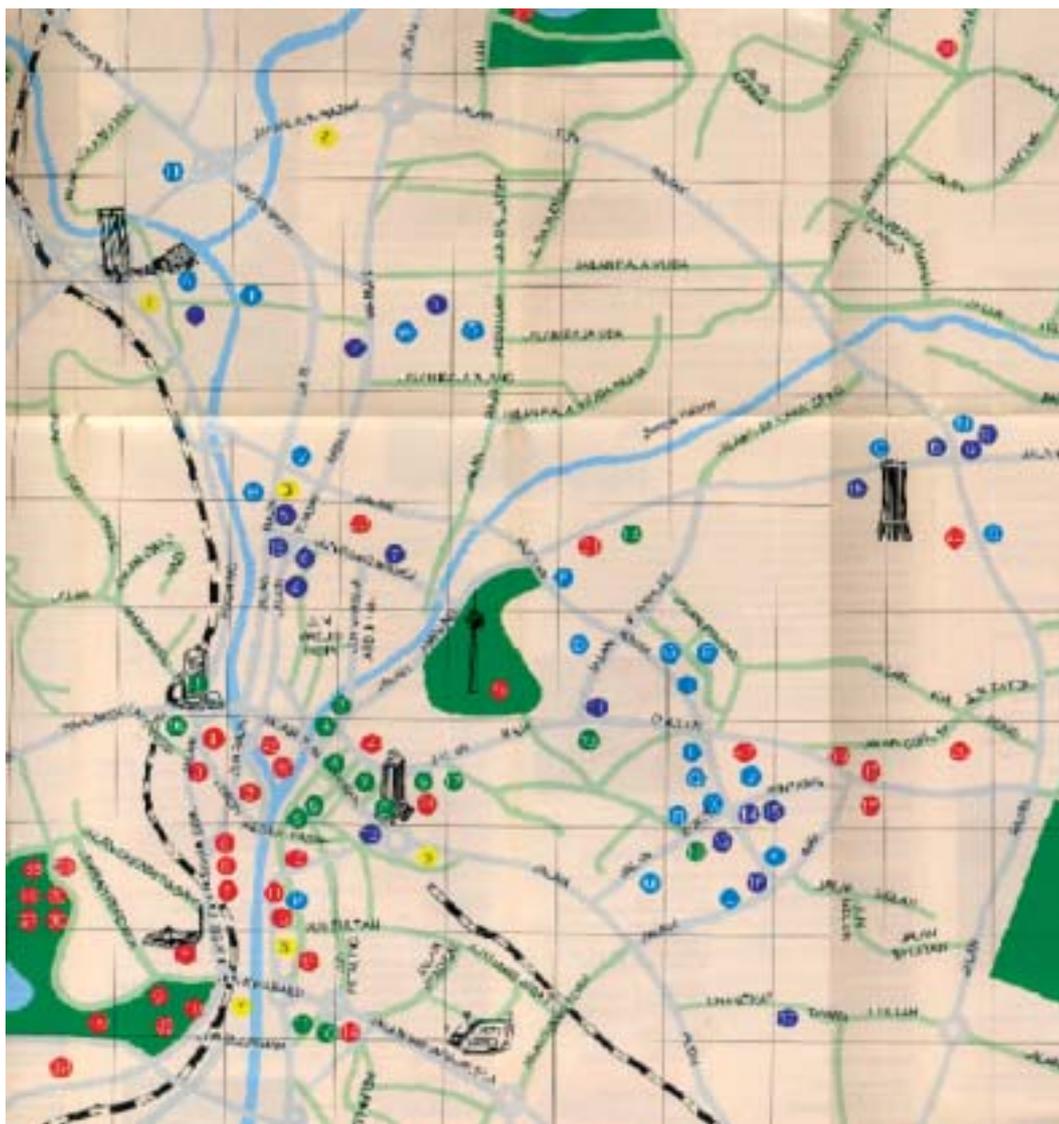
3-9 スルタン・アブドゥル・サマド・ビル (1894-97年)



3-10 クアラルンプール駅 (1911年)



3-11 ロイヤル・スランゴール・クラブとブキット・アマン



3-12 クアラルンプール地図 (1996年)

Malaysia Tourism Promotion Board

Kuala Lumpur Guide



3-13 国立博物館



3-14 国立博物館（壁画）



3-15 国立博物館のマレー文化



3-16 国立博物館の中国文化



3-17 国立博物館のインド文化

3-18 マレー系、中国系、インド系、サバ・サラワクの先住民の伝統的な衣装をまとった五人の女性からなる写真。

3-19 <http://www.mocat.gov.my/> (2004/11/11 にアクセス)

3-20 <http://www.olympic.org.my/-athens2004/pictures.php?-page=pictures/img012> (2004/9/29にアクセス)

3-21 同一映画の同一構図の宣伝用看板の写真。映画の登場人物たちが描かれているが、クランタン州の看板では、女性にたいしてのみ、スカーフで髪を覆っているかのようにペイントされている(クアラルンプールの方はなにもくわえられていない)。



3-22 (1) タブン・ハジ・ビル (1984年)



3-22 (2) タブン・ハジ・ビル (最上部)



3-22 (3) タブン・ハジ・ビル (基底部)



3-23 ダヤ・ブミ・ビル (1984年)



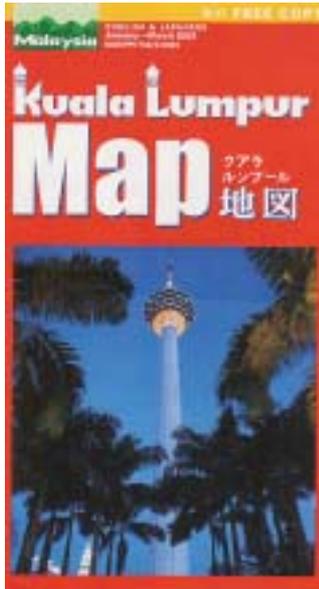
3-24 ダヤ・ブミ・ビル
(壁面装飾)



3-25 (1) イスラーム風オブジェ
(広告塔、クアラルンプール)



3-25 (2) イスラーム風オブジェ
(噴水、クアラルンプール)



3-26 クアラルンプール観光パンフレット
Pacific Tourism Communications
*The Malaysia Visitor Kuala Lumpur
Map, 2003*





3-27 ペトロナス・ツイン・タワー（1998年）



3-28 ペトロナス・ツイン・タワー（低層階内部）



3-29 ペトロナス・ツイン・タワーとモスク

